

新作も続々とリリース!! センスブランドの動向に要注目



センスブランドでは、既製品やワンオフアイテムなど、続々とそのラインアップを増やしている。ここで登場しているF50シーマは、触媒自体の位置を上げ、さらに純正フロントパイプの最下部をフラット状態として、全体を底上げしたステルススクリーンを装着した

スーパースOUND Ver.1とタイコ付きセンターパイプを装着。そして、エンド部には新作のアーチャーシリーズの「ブレード」をチョイスしたシステムとなっている。低車高仕様でも、干渉しにくい設計なのだ！もちろん、そのサウンドはV8エンジンならではの重低音を奏で、その音を聞くだけでエキサイティングなドライブングとなる!!
 新作のマフラーは、今後も登場予定。その動向から目が離せない!!



1.タイコ付きのセンターパイプの部分。タイコの内部は、101ページで紹介している構造で、音には絶対の自信がある! 2.F50シーマのエキゾーストシステム全体は、ステルスKITIによってしっかり上げ加工が施されており、その美しいパイピングと相まってバツグンの存在感を示す。3.F50シーマのリアスタイリングでも、マフラーの存在感は光る! オーナーは福島県に在住の佐久間啓太さん。

↑センスブランドの新作「アーチャーシリーズ」は、2タイプを用意。「シールド」は、スクエア形状でインナー部分に鏡面3D加工した手の込んだもの。そして「ブレード」はオーバル形状でインナーをブラックアウト化してクルマとなじむデザインのもの。価格はどちらも7万7700円となっている。

極みの技で実現できた 最上級の仕上げ!!

センスブランドの製品には、そのノウハウ以上にクラフトマンの技による極みの仕上げが重要なポイントとなっている。どの角度から見ても輝いて見える「リヴォルバー」の3Dデザインは、実は複数の部材を組み合わせて外側と内側にテーパ加工を施して実現する。しかし、その接合の溶接部などは一切見せない仕上げとしていけるところがスゴイ!
 なにしろ「リヴォルバー」&「リヴォルブタイプ」を製作する時は、各クラフトマンとも神経を集中させて、1点1点注意深く作業にあたる。まさに最上級の職人技だ。
 部材も通常より肉厚のステンレスを使用。サウンドを追求すると一切の妥協が許されないのだ。



←溶接は、今でもまれに失敗することがあるという繊細な作業だ。高度な技術が要求されるこの製品は、センスブランドだからこそそのアイテムなのだ!
 →センスブランドを支えるスタッフたち。新製品の開発など、常に熱いミーティングが行われている。右から平山真一さん、結城代表、勝又由香さん、川津圭司さん。



クラフトマンの誇り あくなき音への追求

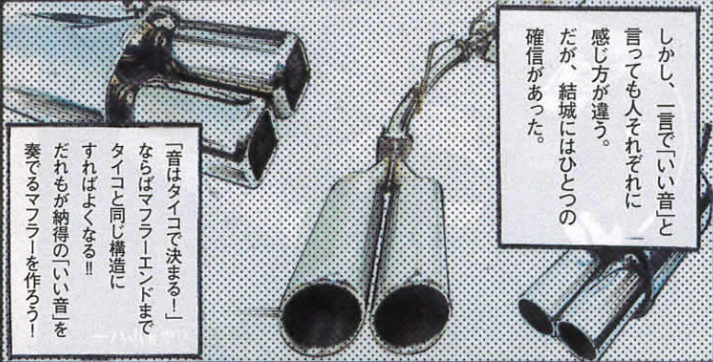
ここにマフラーの音にこだわり続ける一人の男がいる。彼も以前は、ユーザーの立場でドレスアップに對してだれにも負けないことを目指していた!



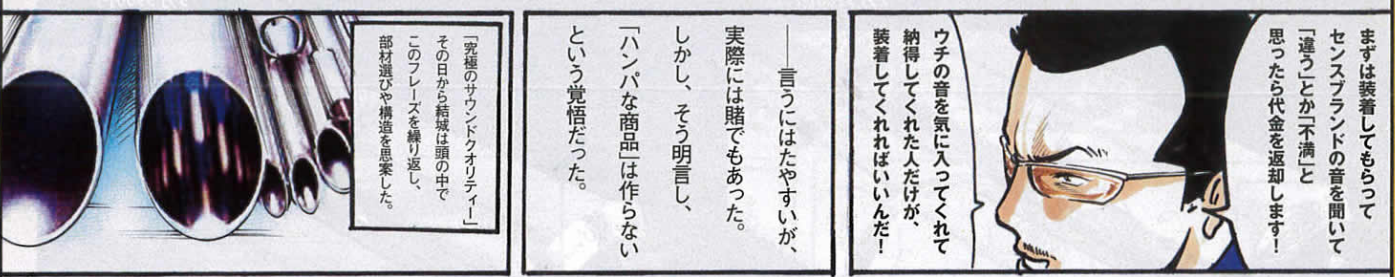
結局、マフラーは音が命だからね!



この一言には結城啓一朗の信念が込められている。「いい音」へのあくなき追求! これこそがセンスブランドが高い評価を得てきた要素でもあるのだ。
 見た目のドレスアップ以上にそのクルマの雰囲気を演出できるアイテムが「いい音」がある。エキゾースト系にあると考えている。
センスブランド 代表 結城啓一朗 (ゆうきけいいちろう)



しかし、一言で「いい音」と言っても人それぞれに感じ方が違う。だが、結城にはひとつの確信があった。
 「音はタイコが決まる」ならばマフラーエンドまでタイコと同じ構造にすればよくなる!!
 だれもが納得の「いい音」を奏でるマフラーを作ろう!



まずは装着してもらってセンスブランドの音を聞いて「違う」とか「不満」と思ったら代金を返却します!
 ウチの音を気に入ってくれて納めてくれた人だけが、装着してくれればいいんだ!
 言っにはたやすいが、実際には賭でもあった。しかし、そう明言し、「ハンパな商品は作らない」という覚悟だった。
 「完璧なサウンドクオリティ」その日から結城は頭の中でこのフレーズを繰り返し、部材選びや構造を思案した。



「いい音」を追求すればするほどに、「コストがアップするんだ...」
 いい音を追求していくと必然的に「のカチ」となった! だが、その製造には確かな技術力が要求された。「溶接部分を一切みせない」などさらなる極みに挑んでいたからだ。
 最初の「リヴォルバー」が出来たときね、「コイツは目玉になる」と確信しましたよ。でもね、スタッフからは「目玉なんだから、少しでも安くしよう」と提案があったね...
 スタッフたちの頑張りや、外部の協力者たちへの恩返しもあって「どうしても、この「いい音」と「最高の仕上げ」を維持して製品化してお客さんに届けたかった。」

「採算度外視」とまでは言わないが、高価な部材と高い技術で製作している商品を安い価格設定にすることにした。1つずついいに作っており、現在でも1日に5~6個の生産という状況。それでも装着しているオーナーの満足している顔を思い浮かべると、チャレンジしてよかったとつくづく思う。

マフラーエンドまでタイコと同じ構造にすれば最高のサウンドが得られることはわかってた。しかし金額に見合わないと製品化はむずかしい……。しかし、「一度決めたことは最後までやり抜く!」結城がこの商品にかけた意気込みの表れだった。